

鎌倉歴史散歩雑感

内田修道

九五年春の歴史を歩く会は、石井喬氏の著作『鎌倉に異国を歩く』に刺激され、厚かましくも『鎌倉に『異国』を歩く』をテーマとした。私の担当は、建長寺と寿福寺（私の実家）となった。

「異国」という視角から考えるとき、何故禅なのかという問いが浮かんだ。時頼は何故蘭溪道隆（大覚禪師）を開山として建長寺を建立したのか。こうした問いを思い浮かべながら史料をさがした。『建長寺史』に別巻として『建長寺史 開山大覚禪師伝』がある。著者は建長寺塔頭宝珠院元住職の高木宗監氏である。

最初に注目したのは、建長三（一二五二）年二月一日建長寺入仏供養の様である。入仏供養の日が迫ると、時頼は建長寺の周囲の要所々に数万の武士を配置した（数字は少々疑問）。当日、百人の武士に守られた蘭溪道隆が三百余名の僧徒を従え、常楽寺を出発、途中行列をつくって建長寺に入ったとある。何故数万の武士の警固が必要だったのだろうか。純粹な禅を追求する道隆と緊張関係にあるのは叡山であろう。このことは来朝した兀庵普寧と入れ替わりに建仁寺へ入った道隆がまもなく叡山一派に京を追われ、鎌倉に戻った事実からも想像がつく。時頼が死去すると道隆は鎌倉にさえ安住できなかつた。

このような京の強大な宗教権力に敵視される道隆に時頼は何故傾倒したのであろうか。高木氏は道隆の常楽寺灌仏会の法語の二節を紹介している。

冀クハ征ヲ休メ戦ヲ罷メ武ヲ偃シ文ヲ修メ寰宇太平ニシテ、清寧字祐ナランコトヲ

この一節は宝治合戦を終えたばかりの若い時頼への訓戒であるという。氏は宝治合戦における三浦氏の最期を「三浦泰村、光村以下同党五百余人は、頼朝公の墳墓の下にある法華堂の前で、浄土宗の行者西阿の勤化によつて、一同阿弥陀仏の名号を称えて自害して果てる」と描写している。この記

述を読んでいるとき、ふと自分の中学高校時代の遠い体験が蘇つた。

東京大学人類学教室の鈴木尚助教（当時）らの手によつて鎌倉時代の人骨発掘が行われた。一の鳥居から海岸に向かって三百メートル位（？）行った左手に、当時大きな空地があり、そこから千体を越える人骨が発掘されたのである。二度にわたる発掘に中学と高校時代に発掘作業の一員として加わることができた。表土を剥がすと、まず鋸でバラバラにされた夥しい馬骨が、直径三〜四メートルの円状になって顕れた。その馬骨を取り除くと、こゝまた、夥しい頭蓋骨が顕れた。それを荒神帚と竹べらで丁寧な砂を払い一つ一つ取り出した。考古学少年にとつてそれは、土器や鎌などと同じ遺物であつた。若しこの骨を死体として、血や破けた衣類や、ひどい悪習などを想像し、また、瀕死の人間として、その悲鳴や慟哭を想像したらとても発掘などはできなかつたであろう。

図らずも高木氏の三浦一族の最期の場面の描写を読んで過去の体験が今度はなまなましい情景として蘇つたのである。宝治合戦での時頼の激しい緊張が伝わってくるように思えた。執権として、時頼は一族の命運を一身に背負っていた。勝者は敗者に明日の我身を見る。念仏では時頼は自己の主体性を保持しえなかつたのではないだろうか。時頼の禅への帰依を何がしか解るように思えた。

歩く会の途次、ふと死体と遺物との境界はあるのだろうかと思ひ、何を根拠として虐殺現場と遺跡とが区別されるのかと思つた。前者からは倫理や責任が問われるが、後者にはそれが見えない。見方なのか、時間なのか。はつきりしないまま帰途についた。

年報も十号を数えることとなつた。偏に会員諸氏の努力の賜物である。我が齢は五六歳ながらわが子は十歳前途洋々である。

（京浜歴史科学研究会代表 九五年一月三日記）